

現代の名工 宮本義雄氏に聞く

熊本県立技術短期大学校 釜田 浩
職業能力開発総合大学校 松本義江・熊一 修

このたび、平成12年度「卓越した技能者」を受賞された宮本義雄氏を訪ねました。宮本さんは熊本市在住の建築塗装工であり、有限会社建塗工業の代表取締役として70歳を超えた現在でも現場の第一線でご活躍されています。「技能」についての考え方、技能習得の苦労話、若い世代へのメッセージなど熱く語っていただきました。



1. 平成12年度「卓越した技能者」の受賞について

評価された技能についてお聞かせください。

熊本市内にカラオケ屋さんがオープンするとのことで、特殊な塗装の仕事ができる者がいるだろうかという問い合わせがありました。「錆が出たような古代の色を作りたい」という希望でした。これはどうも古代色仕上げを言っているのだなと、ピンと来たわけです。「いいですよ。作ってみましょう」と言って、私が見本を作ったのです。鉄に錆を作って磨いてみたら、「あ、これだ」ということで、それを採用していただきました。

それがきっかけで、こんどは福岡の業者から「ブティックの外壁に鉄板を張って、それに錆を出したい」という希望でした。ブティックでは、バックがあまりきれいだと商品が目立たないということで、お粗末な感触のデザインを作ってあげました。

塗装の技術は膜を作って保護するというのが基本

ですが、逆に塗らないで保護する方法もあるわけです。錆が発生して凹凸ができた表面に油をしみ込ませて磨く、そうやって非常に古めかしい感じにしたのです。

これは単なる塗装じゃないですね。芸術の世界、何ともシックな感じですよ。

その発想はというと、私たちの徒弟時代は全部自転車だったのです。自転車といっても、戦後すぐですから新品はなく、ハンドルなどに錆が出ているのですが、それを油で磨けばどんどん黒光りして、ものすごくきれいに文様が見えるわけです。そういうことが50年前にありました。すごくいい古代色の、本当の鉄の古い色が出るのです。それを思い出して「ああ、あの感触かな」ということで、それをやったらお客さんに喜ばれました。

全く独自に編み出された発想ですね。

これ1つやるにしても、塩酸、苛性ソーダ、酢や

しょうゆなどいろいろな薬品を試してみました。いろいろな塗料でもやってみました。試行錯誤の末、材料は塩酸と塩。結局、塗料は保護するものだということが頭にあるものですから、そうではない、まず磨くということを念頭に置いたわけです。

2. 職務内容と必要な技能

塗るというより表面を保護することなのですね。

われわれはあくまでも塗装業ですから、まず塗ることが条件づけられるわけです。塗る目的は何かといえば、保護と美粧、腐らせないということです。私がいつも言うのは、「塗ったものは必ずはげますよ」ということです。300年も500年もたった神社・仏閣でもほとんど腐りが出ていない。ケヤキの3尺の柱でも表面は枯れていても中は腐っていないのです。これは塗ってない証拠です。柿渋とか漆そういうものを塗っているだけです。だから長持ちします。

塗るということは、膜を張ってしまうことです。膜を張れば木は死んでしまう。日本家屋にしても、中をクリアラッカーなんかで全部膜を張って塗ってしまえば呼吸ができないから、30年もたてば順に倒れます。水分を吸ったり吐いたりして木が息をしているから長持ちしているわけです。その原理で塗らないほうがいいのではないかということをお客さんにも言っています。

仕事に対して普段心がけていることがあればお聞かせください。

常日頃からいろいろなことを試しておくことです。建物ができて塗装といえば、もう最後の最後でしょう。日にちもほとんどない。その状況で他に負けない仕事をやろうと思ったら、よほど常日頃から技能・技術を蓄えておかなければ、まずできません。知っていれば何でも応用がきくわけです。

使用材によっては鉄に塗るものを木に塗ったり、木に塗るものを鉄に塗るというような応用はやるべきだと思います。うまく応用してやれば使えない材料はないのです。

材料を作る場合も、これとこれを混ぜ合わせて成



発錆古代色仕上げ



木部の古代色仕上げ

分を調べて、次はそれを使ってやる。固まってしまわない以上は、塗料には捨てるということはほとんどないのです。ですから、うちはよそよりも残材が少ないと思います。

3. 技能の習得方法

「技能」に対する考え方について。

今は労働基準法で週40時間とか言われています。実際、一般サラリーマンや公務員に対してはいいのかもしれませんが、ところがわれわれ零細企業の労働者なり技術者に対しては非常に当惑している問題です。実際に働くのはのは40時間でもいいのです。ところが、自分の能力がどの程度なのかという能力計算をしないで、ただ労働時間だけを計算しているということは、われわれのプロ意識からすればちょっと疑問ですね。

それはすべてのプロに通用すると思います。例え

ばスポーツの選手にしても40時間訓練などありません。特訓，自主訓練というかたちでやって，初めてトップスターに上がっていくわけですから。

スポーツの話で，ちょっとわき道にそれますが，スキー，ゴルフはかなりの腕前なのですが。私はスキー，ゴルフもやります。

スキーは準指導員と検定員の資格を持っています。宮本スキークラブという，うちのクラブには60人近い会員がおります。熊本県スキー連盟の役員もしているし，国体にも監督で6回行きました。

スキーも一緒なのです。人の上に立とう，人よりも上手になろうと思えば，人が1回滑るのを3回ぐらい滑らなければいけない。そして上級者から習わなければいけない。自我流では頂点が決まっています。ある一定の限界に来たらそれ以上伸びないのです。ところが基礎を知っていれば，それからどんどん応用に移っていきます。

ゴルフでも一緒です。人より努力して，人よりも上手になりたいならば人の技を盗む前に自分のやり方を変えなければいけない。人の技を盗んでも体格が皆違いますから，そのまねをしてもできないのです。自分なりの体で習得しなければいけません。

スキーでもゴルフでも一緒です。何でも人並みのことをしていたのではだめです。

「技能」「技術」を磨くうえで大切なことは何ですか。

基本は学校で教わります。ところが基本の応用が非常に難しいわけです。同じ材料を使って同じことをやるのは，早い，遅いは別として100人が100人できます。ところがそのやり方によって，人が1平米するときには2平米できる方法を考えるのです。塗ることに対して，人が1刷毛使うときに自分は2刷毛使えるように，若いときからそういうことは習ってきていますから，人よりも何かを考えようという発想はできます。そうでないと設計書どおりの仕事ならばだれでもできるのです。

徒弟時代は今みたいにお金がもらえない，いくら働いても金にならない時代です。ならば，何か特技



技術指導の様子

を持たなければいけない。そうすれば人よりも多くもらえる。われわれの時代はそういう生きがいがあった。だから私は「発想」ではなくて，「八足」と書くのです。ただ1つを思うだけではなくて8つの方法を考えるという意味です。

このように，もう少し早く，簡単にできる方法がないかということで，私は自分なりに日々研究しているのです。

今までの苦勞話についてお聞かせください。

以前は「技能の盗用」といって，先輩から技能を教わること自体がなかったのです。盗まなければいけない時代でした。

昔，熊本市内の花畑公園に交番がありました。それは木造で，腰板にベニヤを張ったらあまりにもお粗末だから木を描いてくれと頼まれました。ヒノキの木目でもスギの木でもいいから，腰板が重厚になるような感じを出してほしいということでした。そのときは第三者に見られないように白の天幕を張って，夜に作業をやりました。除幕式をしたら，きれいな腰板の木ができていた，そういうエピソードもあります。それほど「技能」というのは教えるのではなくて盗まなければいけない時代でした。

4．技能の継承

今，こういう業界の若者はどうなのですか。いや，残念ですけど，技能の低下はもう仕方がな

いですね。

学制的、文章的には覚えても、実践としては、おそらく今の技能者は、10年やった者でも、われわれの徒弟時代の2年分しかないでしょう。実際に10年選手で1級、2級を持っている人が来ますけれども、仕事を知らないことが多いんです。例えば「この材料で塗りなさい」と言っても、その材料の使い道をまず知らない。なぜかという、ただ言われて行ってやるだけであって、言うならば三食付きのロボットとっていいですね。技能の低下は寂しいです。

若い方々にアドバイスをお願いします。

若い人たちにお願いしたいのは、「自分は塗装のプロだ」というプロ意識を持ってもらいたい。これはどの職種でも同じです。

プロ意識を持つとは、人以上に努力しなければいけないということです。その代わりに頂点はありません。人と同じことをやっているとプロにはなれません。プロになるということは、頂点がない代わりに、一生かかってもプロの名はすたれはしないわけです。塗装というものには限界がない、やればやるだけどんどん奥が深くなっていくものです。

現場での技能・技術指導について。

昔は幅木なんかを塗るときにテープを貼ったりしなかった。テープを貼るといって自体が職人として恥だったのです。いかに刷毛の先で、きれいに塗るかというのが自慢だった。テープを貼らないで、きれいに塗るのがプロです。たまたま汚すこともあるけれども、汚したものを取ることも技能です。テープを貼ると養生はできるが塗り方が雑になる。そうするとテープの間からにじんでいくわけで、また手間がかかります。

だから現場に行くとテープを貼っていると、私は「何でテープを貼るか」と怒るのです。「こうやって塗ってごらん」と言って塗って見せます。「1、2、3。ハイ、息止めて。ハイ、塗る」。スーッといくのです。息を吐いたり吸ったりしながらやるから手に伝わってブレる。塗るときは吸った息を止めると手はおとなしくなる。たった1秒か2秒止めるくら

いだけでもできるじゃないか。やらせるとできるのです。

そういうことをだんだん教えていくとテープ代が助かります。年間何十万円とかかるので、経費削減、手間の削減です。貼ったものははがなければいけない。はいで下が汚れていけばふかなければいけない。三重手間です。ところがきれいに塗れるようになれば1回ですむわけです。汚れても、塗っていきながら、そこだけを掃除しておけばすむわけです。

公共の職業能力開発施設への期待などございましたら...

今は「技能」を教える方がいなくなってきた。企業内職業能力開発校とか、職業能力開発短期大学校などで技能の向上のためには学科、理論だけでなく、実技の技能を指導していただきたいと思います。

職業能力開発校で指導してくれと言われたら、私は理論は二の次にして、まず塗ること、技能を教えます。理論は夜でも勉強できます。ところが技能は物体がないとできないわけです。

いかにきれいに、早く、その高度な技能が持てるかということは理論には書いていません。

ポリテクセンターに私の同輩がいて、塗装の講師で十何年か勤めていました。私は口が酸っぱくなるほど言っていたのです。

「教本に書いてある本だけ読むのはおれだってできる。あんたはプロでしょう。技能を教えてくれ」

5. 今後の抱負

今後の抱負についてお聞かせください。

全国には私以上の人がまだ何万人といるかもしれませんが。今年はたまたま推薦者がいて、熊本県でこういうことをしたということが認められたということです。

先ほども言いましたように、塗装というものには限界がない、頂点がないのです。

私はプロの意識を持っているだけであって、最高技能者ではありません。プロならば人に負けないようないい工法を編み出すのは当然のことです。